
バーチャル

志賀狸板

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バーチャル

【Nコード】
N0128V

【作者名】
志賀狸板

【あらすじ】
人知れずサービスを開始した、どこか奇妙なネットゲームバーチャル

高校のゲーム愛好会に所属する少女達は、このゲームの奥深さと不思議な魅力に触れ、次第にのめり込むようになる。バーチャルを通じて青春を取り戻してゆく少女達。

一方、同校で一人の少年が死亡する事件が起きる。それはゲームプレイ中の、突然の不審死だった。

序： YOU DIED

「はあッ、はあッ、かはっ！」

探検家らしい青年が、息を切らせながら走っている。

松明の火が揺れ、壁の彫刻を照らし出す。そこは遺跡の内部通路である。

「ウゴオオオオオ！！！」

背後の闇から、何かのうめき声が聞こえる。

地響きのような足音。明らかに、人間ではない。

青年に、体力の限界が訪れる。脚がもつれ、今にも倒れそうだ。

振り向くと、すぐ後ろに怪物の姿があった。

身長3メートルはある人型のバケモノだ。首も、腕も、胴体も、異様に太い。

体にまとった金色の鎧は、所々錆びてはいるが、高級な物だとわかる。

全身に巻かれた太い鎖が、無理やり引きちぎられている。

「くそッ」

青年は体を怪物の方に向けた。腰の探検を引き抜く。

「くそッ」

少年は、拳で机を叩いた。もう一方の手は、せわしくキーボードを叩いている。

暗い部屋の中、明かりはパソコンのディスプレイだけ。

その青白い光に照らされた少年の顔は、恐怖にひきつっていた。

「何なんだよ、おい！」

その恐怖の正体は、少年自身にも解っていなかった。

ただ、怖い。背後に何かの気配を感じる。

それでも彼はゲームを止めない。

少年には、解っていた。今画面に映し出されたこのバケモノ。

こいつに殺されてはイケナイ。もはやこれは、ただのゲームではない。

画面上の怪物が、その腕を振り上げる。

それは正確に青年の体を捉え、落とされる。

青年は激しく吹き飛ばされ、松明が床に落ちる。

一撃で、青年のライフは、ほとんど削られていた。

少年の呼吸が一層激しくなる。もちろん彼自身に痛みは無い。

だが、恐怖は一気に増大する。目の前の画面が涙で滲む。

少年は、泣いていた。

「なん、なんだよ、この、ゲーム……」

バケモノが、一層大きな雄叫びを上げる。

巨大な拳が凄まじいスピードで青年を殴りつけた。

「ひぐウツ！」

少年は最期に、声にならない悲鳴を漏らす。

暗転した画面には、こう表示されていた。

YOU DIED

1： インストール

「新入生歓迎！ ワクワク、新作ゲーム大会〜！」

「いえーい！」

夕暮れの教室に響き渡る歓声。歓迎会開始を、長身の少女が宣言した。

二人の部員が、拍手で応じる。

「おお！ ありがと、里美」

当の新入部員、絵梨は笑顔で拍手に加わった。

放課後、部室には四人の生徒が集まっていた。

一人は長身、長髪の少女、美咲。

先程、自分で宣言した開会の文句が恥ずかしかったようだ。口元に手を当て照れ笑いしている。

「今回もあたしの圧勝っすよ」

自信に満ちた顔で言ったのは、まだあどけない顔をした少女、夏実。

部員の中でも最年少だが、一番威勢が良い。

「いや、今回こそは負けねー。たぶん」

売り言葉に買い言葉で返したものの、最後が若干尻すばみなのは、二年生の綾乃。

年下の夏実にガンを飛ばされ、若干押され気味だ。

そして新たに入部した絵梨。

新入りでありながら、どこか堂々とした雰囲気をもっている。

「じゃあ部長！ 今日のゲームを発表してくださいよ」
夏実が囁きたてる。

四人はそれぞれポータブルタイプの小型パソコンを膝に置いて待機していた。

「それでは、今回のゲームを説明しまーす。

今回は、我らゲーム愛好会としても珍しい、オンラインゲーム、ですっ」

「おー、思い切ったねー部長」

夏実が感心して声を上げる。

「へえ、ここってネットゲもやるんだ」

新入りの絵梨には少し意外だったようである。

「そうです。部員も四人になったということで
うちの部もそろそろ、ネットの海に潜ろうかなーっていう企画で
す」

「あー、アタシあんまりネットゲやったことないし。

今回はちよつと厳しいかも」

早速自信の無さそうなことを言う綾乃に対して、

夏実はまだ勝った気で笑みを浮かべた。

が、すぐに一つの疑問が浮かぶ。

「でも何のゲーム？ ネットゲで勝ち負けってどうすんの？」

「お、いい質問です。今回はですねー、割とアクション性の高いRPGを用意しました。

サービス開始後一週間の活きの良いゲームですっ！」

夏実の質問に対して、美咲が答える。

「なるほど、アクションは負ける気がしないね、正直」

夏実は指をバラバラに動かし宙を叩く。

彼女の生み出した、素振りならぬ、素タイピングだ。

本人が言うには、素タイピング無くしてアクションの基本は定着しないらしい。

「で、勝負に関してですけど、今回のゲームはMMOなので、とりあえずインストールして、

慣れてきたら何らかの形で勝敗を決めたいと思います」

「そのゲームってPVPありなの？」

「有りです。最初はPVPで勝ち抜き戦でもしようと思ってます」

「だよね。勝負してこそその我が部だしね」

部長の答えに、夏実は満足そうだ。

MMOとは、不特定多数のプレイヤーが同時に接続し、ゲーム空間を共有するタイプのオンラインゲームだ。

多くの場合MMOではプレイヤーどうしは協力することを求められ、プレイヤー間での対立は遊び方の主流とは言えない。

とはいえ、プレイヤー対プレイヤーの戦闘の場合は用意されていることが多い。

それがPVP、各々のキャラクターを操作し、勝敗を決する戦いである。

「じゃあ、今から皆さんのパソコンにアドレスを送るので、

そのアドレスからゲームをダウンロードしてください」

里美が、自分のパソコンを操作しながら言った。

インターネットの無線通信はここ十数年で爆発的に普及していた。今や小型のパソコンを持ち歩き、街のいたる所からネットに接続できる時代である。

街は通信網に覆い尽くされ、学校の敷地内からも例外無くアクセス

できる。

全員のパソコン画面に同じウェブサイトが表示された。
新作MMO「バーチャル」の公式ホームページだ。

少し変わったサイトだった。他のゲームの様な、派手な宣伝文句もない。

画面上には広大な草原と、遠くにそびえる白亜の塔のみが映し出されていた。

青空には雲がゆっくりと流れている。

その下に、ゲーム運営からのお知らせなど、必要最低限の事のみが書かれていた。

四人はダウンロードページにアクセスし、
ゲームプレイに必要なファイルをダウンロードし始めた。

「つーかサイズでか！ アタシのPCじゃインストール一時間近くかかるわ。」

綾乃が漏らした不満に、部長が提案する。

「それじゃあ、その間に学校案内しようか。絵梨はまだ詳しくないよね、学校」

「あ、いいかも。じゃあ、お願いしようかな」

本人も賛成する。

それぞれ小型パソコンをたたみ、腰のポーチに収納して席を立つ。

教室を出るとき、絵梨は窓の外に目を向けた。

時刻は午後四時三十分。校庭からは運動部の活気にあふれた掛け声が聞こえる。

どこか懐かしい感じがした。

新しい学校での生活は、穏やかなものになりそうな予感がした。

校舎をぐるりと一周し、一行は屋上に到達した。

時刻は五時。夕暮れの街の向こうに、大きな工場のシルエットが見えた。

風に髪をなびかせながら、美咲が絵梨に言った。

「そう言えば、昔はよく山の神社で街眺めてたよね」

「ああ。だね」

「え、絵梨さんって昔この町に居たん？」

「うん。中学上がる頃にね、引越したんだけど」

綾乃の問いに、絵梨本人が答える。

「ところでさー、部長」

夏実が尋ねた。

「はい、なんででしょう」

「バーチャルってどんなゲームなん？ 部長が選んだんだから、それなりに理由があるんでしょ？」

「うん、ちよつと気になるゲームなんです、これ。」

「気になる？」

「これね、開発元も運営も聞いたことない会社なんです。

その割にはクオリティーも高いし、

なんといつても、開発のスピードが異常に早いです」

「開発のスピードって？」

今度は絵梨が尋ねる。

「私、知り合いに教えてもらって、サービス開始時にこのゲーム始めただけだね、

その時はまだマップは草原しかなかったんです。

広い草原に白い塔が建ってるだけで、他のプレイヤーも何していいかわからなくて」

「それってホームページの？」

「そうそう、あのマップ。でも一週間のうちに色んな要素が追加されてて、

あつという間にちゃんとしたゲームになったの。

今はだいぶ落ち着いてるけど、それでも結構なペースでゲーム内容が進化してて。

このペースで行くと、このゲームはどこまで凄くなるんだろうって。

それで興味を持ったの」

何やら考え込んでいた綾乃が尋ねた。

「でもそれって、先にゲームの中身作つという、開始後に追加していったんじゃない……」

「うーん、それも考えたんですけど、

でも、あんな何もない状況からゲームを始めるのも不自然だし」
「それもそうか」

綾乃が一応納得したところで、夏実が口をはさむ。

「まあ、アップデートが早いのはいいことじゃん。飽きないしね。それで、今のところはどんなものなの？ ゲーム内容は」

「えっと、今では二つの街を含む八つのエリアが存在します。で、ダンジョンが七つ、だったっけ」

「なるほど、一週間でそこまで増えたんなら、大したもんだな」

夏実も綾乃も、満足げにうなづく。

「あ、それとまだあるんですよ。このゲームの一番不思議なポイント」

「お、なにになに、聞かせてよ」

もったいぶった態度の部長に、三人は身を乗り出す。

「えーと、それはですね、お金関係なんです」

「お金って、リアルの？」

「そうです。課金に関してです」

ネットゲームには、月額で料金がかかるものもあれば、基本は無料で、ゲーム内の特典に料金をかけるものもある。

これらは課金と総称され、ほとんどのネットゲームに、何らかの形で存在する。

「このゲームの課金ってすごく変わっててですね。

料金がかかるのは一か所だけ、死んだキャラを復活させるときです」

それを聞いて、夏実はちょっと不満そうだった。

「えー、それって結構きつくない？ 死ぬ度にお金かかるんでしょ。大体幾らくらい？」

「それも死ぬ状況によって違うんですけど、平常時は五十円ですね。でもダンジョンとかによってはもっと高くなるけど」

「うーん、あんまりお金ないからなあ。死ぬ度五十円はちょっと…」

綾乃も言う。綾乃はしばしば、金欠だと不満を漏らしているのだ。

「まあ、待ってください」

部長が、まあ落ち着いて、というようなポーズをとりながら言った。

「お金に関して、もうひとつ特徴があるんです。

なんとですね、賞金が出るんですよ、このゲーム」

「へ？ マジ？」

間抜けな声を出す綾乃。

「「おお、面白そうじゃん？」」

一方、絵梨と夏実は見事に声を揃えた。

「そうなんです。イベントとか、PVPトーナメントとかですね。

結構な賞金が出ます。昨日二百人近くのプレイヤーが参加するリーグ戦が行われて、

一位には五十万、更に二十位以内にまで賞金が出ました。

たぶん、このゲーム部のメンバーなら、いい線いくと思いますよ」

「なるほど、腕が鳴るね」

夏実はいつもどおり強気だ。

「ああ、アタシも本気出すわ、これ」

綾乃も俄然やる気になっている。

「あ、美咲。そろそろみんなインストール終わったんじゃない？」

言いながら、絵梨は自らパソコンを開けて確認する。

インストールは終了し、いつでもゲームスタートできる状態だ。

「そうだね、じゃあみんな、部室に戻ろうか。寒くなってきたし」

空は紫に染まり、風も強くなってきた。四人は階段を降り、部室へ向かう。

下校時刻まであと一時間ほど。
絵梨が入部して、最初の部活動が始まった。

2： 部内PVPトーナメント

各々のディスプレイには、ただっ広い草原が表示されていた。四人は白い大きな石の塔の前にいた。

「雲とかめっちゃリアルじゃん」

夏実は、ゲーム内ではショートカットの少女、ナッツに扮する。その容姿はどこか本人に似ている。

夏実だけではない。

他の四人も、どこことなく本人に近い印象のキャラクターを作っていた。

「美咲がサキでしょ。で、綾乃がアヤカシでしょ。」

で、絵梨がエルか」

「そうそう」

混同しないよう、それぞれ本名に近い名前を付けている。

美咲も、公平性を保つため、新しいキャラクターで

新規にスタートした。

「おっけー。じゃあ皆さん、最初のミッションに行ってみましょー」
「お！ 出た部長ミッション！ 今回の指令は何ですか？」
「今回はですね、皆さんそれぞれ、使用する武器を見つけてもらいます。」

制限時間は三十分。気に入った武器が見つかったら、後は適当にスキルでも上げてください。

移動範囲はここ、【英雄の丘】に限定します。

その後、ここでPVPトーナメント戦をしますので操作練習を兼ねての武器探しです。

賞品は会費で買った、ちょい高級なシュークリームです」

「えー、それ部長有利じゃん。経験者だし、なんかハンデ付けよう」

こういう時は、いつも綾乃が真っ先に文句を言う。

「たかが一週間じゃないですかー。皆さんの力ならこの程度余裕ですよ」

そして、これもいつも通りなのだが、美咲は笑顔で却下した。

「いやいや、イけるイける。」

というか文句言う暇あったら、操作に慣れとけよお」

大体いつも強気なのが夏実であるが、彼女の場合は本当に強い。

「美咲、これどこで武器見つければいい？」

「いちばん簡単なのはモンスターのドロップかな、やっぱり」
「モンスターどこ？」

「あ、ちよつと歩けば、そこらじゅうにいるよ。」

というか、まだあんまり情報ないから、

武器の入手法は他にもあるかも」

ナッツは真っ先に走り出した。他三人も追いかける。

少し丘を下ったところで、モンスターの姿が見え始めた。

画面を睨んでいた綾乃が顔を上げた。

「じゃ、はじめよ、部長」

「そだね。それじゃ、今から三十分です。ゲームスタート！」

高らかに、開始の合図がなされる。

皆一斉に近くのモンスターを殴り始めた。

「え、みんな早っ！」

一方絵梨は、攻撃の仕方も解らない。

その様子を見た夏実が、にやりと笑う。

「絵梨さん、うちの部の勝負はマジっすよ。

でも新入部員なんで、ヒントやるっす。

カバン開いて、アイテムを装備ですよ。

あとは、基本はネットで情報収集しながらプレイすることかな」

「……マジ？」

先程まで、のんびり談笑していたように見えたが、

実はすでに情報収集を済ませていたのだ。

絵梨は面食らった。

とりあえずカバンを開く。

アイテムは一つだけ。ブロンズナイフ を装備する。

エルの手には、鈍く光る短剣が握られた。

同時に、新たなコマンド「斬撃」が追加される。

「おっけ。ありがと夏実」

「いえいえ」

簡単に礼をし、まずはそばにいた。ウサギ型のモンスターに切りかかる。

怯んだところにもう一撃。さらにもう一撃。

「つて、うおっ」

油断したところで、三撃目は外してしまった。

隙をつかれ、ウサギの反撃をくらう。

ライフが三分の一も削られるのだが、絵梨は気づかない。

初心者向けの相手だからと、完全に油断していた。

ゆえに、何の躊躇もなくウサギに向かっていく。

そのまま頭突きのコンボを受け、あっけなくエルは倒れた。

「えっと、死んだんだけど……」

「えー、ちよつとマジで？」

こらえきれず笑いだす綾乃。

「ちよつと、そこそんな笑うところ？」

突っ込む絵梨。

「いやいや、誰にやられたん？」

夏実まで覗き込んできた。

「えと、ウサギ……」

「うわ、《草原ウサギ》。最弱モンスターっすよ」

口元に手を当て、笑いながら言われた。

「いいよ、払うから。もう絶対死なないし」

多少ムスツとしながら、絵梨は電子マネーで五十円を払う。

結局この日、絵梨百五十円も使うことになるのだった。

「さて、三十分経ったんで、丘の上の塔まで来てください」

部長の呼びかけに答え、部員たちはそろそろと移動を始めた。

「PVPは何使うの？ みんな」

「私は スパイダーナイフ で。」

綾乃の質問に最初に答えたのは夏実だ。

「私は…… 錆びついた剣 にします。絵梨と綾乃ちゃんは？」

「アタシもじゃあ、 スパイダーナイフ で」

絵梨の答える番なのだが、何しろ武器自体あまり手に入れてない。

「うーん……」

二つの武器を見比べる。

「見せて見せて！」

夏実と、それに続く二人が絵梨のパソコンを覗く。

「初級の弓とこん棒ね。どっちかと言つと、扱いが難しいのは弓の方かな。」

矢も必要だし」

「絵梨さん、そこは敢えての弓つすよ」

「だね、じゃあ弓で」

ノリで難しい装備を選ぶ。

「よし、装備も決まったところで、PVP用の闘技場に向かいます。」

皆さん、塔を調べてください」

エルは白くそびえる塔に近づいた。

『地下闘技場に移動します』

メッセージが表示される。

次の瞬間、エルの体は別の空間に飛ばされていた。

「うわあ」

感嘆の声を漏らす。

それはすり鉢状の、巨大な空間だった。

目線のはるか下、底にあたる部分にはいくつもの舞台が用意されていて、

その一つ一つでプレイヤー同士が激しい戦いを繰り広げていた。

それを取り囲むすり鉢の側壁の部分にはずらりと観客席が並べられ、数百のプレイヤーが戦闘を観戦している。

太陽の光が届かない、この地下大空洞は、

無数のランプの灯りで照らされ、熱気を孕んでいる。

「上ではあまり、他のプレイヤー見なかったけどここにいたんか」

ナッツは早速階段を下りてゆく。

「今、正面に見えるのが一番闘技場。いちばん大きくて目立つ闘技場で、それなりに実力のあるプレイヤーでないと利用できないんです。移動しながら、美咲が説明を始めた。」

「全部でいくつあるの？」

同じく移動しつつ、綾乃が訊いた。

「三十二ですかね。十番以下は、大体誰でも使えます」

サキが受付のNPCに話しかける。

簡単に手続きを済ませ、二十二番闘技場をレンタルした。

まずサキが闘技場の控室へワープする。

三人もサキに倣ってNPCに話しかけ、移動させてもらう。

「トーナメントの組み合わせはランダムで決めるね。」

えーと……一戦目はエル対ナッツ

二戦目が私とアヤカシ。そして三戦目が勝者同士の決勝戦です」

「お、絵梨さんとか。のんびりしていると瞬殺つすよ」

「言いおるわ」

「それでは一戦目、準備はいいですかー？」

「「おーけー！」」

同時に答え、二人は控室からワープした。

エルが立っていたのは、障害物として石の壁がいくつも置かれた広い部屋だった。
ここからは見えないが、向こう側の障壁の裏にナッツはいるのだろう。

障壁を盾に向こうを覗き見るが、ナッツは現れない。
矢をつがえ、引き絞る。じっと狙いを定め、機をうかがう。

「あっ」

緊張で手元が狂い、エルが矢を放ってしまう。

「うかつっ！」

夏実がわらう。

障壁の一つからナッツが飛び出してた。

すぐに次の矢をセットして狙うが、

放たれた矢は山なりの軌道を描き、ナッツの頭上を通り越えてゆく。

「ちっ」

逃げようとしたところで、ナッツの構えたナイフの切っ先は目の前まで来ていた。

クリーンヒットとはいかなかったが、刃はエルの体をかすめて、わずかにダメージを与える。

「固いね、絵梨」

思いのほかダメージが小さかったのだろう。夏実がつぶやく。

「〔生命力〕多めに振ってるからね」

少し距離をとってもう一度狙うが、やはり当たらない。

一気に間合いを詰められ、もう一撃、今度はより正確に斬られる。

「?」

「気付いたかな?」

絵梨が、何かの違和感に気づく。

「スパイダーナイフ は、威力で言えばかなり弱い部類の武器です。」

この武器の最大の魅力は、オートコマンド「スロウ攻撃」。
斬られるたび、移動速度が遅くなるっす」

「くっ!」

間合いをとる必要がある弓使いには、きつい条件だ。

完全に、近接戦闘に持ち込まれていた。

距離をとれないので、狙いづらい。

でたために射るものの、全て華麗にかわされる。

「最後!」

その一突きは、正確にエルの心臓を捉えていた。

「勝負あり!」

部長が右手を上げ、試合終了を告げた。

ナッツとエルが控室に戻る。

「ヤバいね、勝てる気がしない」

「夏実ちゃんはうちの部のエースですから。

特にアクション系は、部内で負けなしだよね」

「うっすっ」

ガッツポーズをとりながら胸を張る夏実。

「じゃあ、次は私と綾乃ちゃんだね」

「うーす」

今度はサキとアヤカシがワープする。

結論から言えば、美咲の圧勝だった。

アヤカシの スパイダーナイフ は一度しか命中しなかった。

サキの体の芯を捉えた良い攻撃だったが、

数回当てなければ、この武器の真価である「スロウ攻撃」は十分に発動しない。

結果、サキの短剣でじわじわとライフを削られ、あっさりと勝負が決まった。

今、闘技場に立つのは、サキとナッツ。決勝戦だ。

美咲と夏実が自分たちのパソコンに向かい、その脇で絵梨と綾乃が見守る。

画面に試合開始のメッセージが現れる。

『3』『2』『1』『 Fight ！！』

同時に、二人が走り出す。

すれ違いざまに剣を振る。

いずれも命中し、双方のライフが削られる。

完璧なタイミングで、凄まじいスピードで、夏実がキーボードを叩く。

「すっごい……」

綾乃が声を漏らした時にはすでに、瞬時に振り向いたナッツのナイフが、サキを背後から斬りつけていた。

「振り向きざまの攻撃も完璧って……、さっすが夏実ちゃん！」
「ふふん」

両者素早く距離をとる。

ナッツはキャラ作成時、ステータススキルを極端に「瞬発力」へ割り振っている。

そのスピードを十分に活かしかれるのは、夏実の自身の反射神経があつてこそだ。

「部長、そろそろ本気出してくださいよ」

「そうだね、コマンド使いますよ」

サキの使用武器 錆びついた剣 も スパイダーナイフ 同様、攻撃力は低い武器である。

それを補うのがコマンド「全力解放」。

自らライフを削り、ステータススキル「筋力」、「瞬発力」を一時的にアップさせる。

捨て身のコマンドだ。

「コマンド発動」

サキの手に握られた 錆びついた剣 が、鈍い光を放ち出す。鼓動の様に明滅する赤い光。同時に、サキのライフが減少する。

「そんなにライフ削っちゃ、あと三発程度で終わりっすね」

「この状況で当てられますか？」

強化されたサキの「瞬発力」は60。ナッツの二倍である。

今度はゆつくりと、二人が間合いを詰めてゆく。
互いに、極めて慎重に相手のリーチを測りながら。

「今！」

サキが剣を振り下ろす。

ナッツは体をずらしてかわし、ナイフで突こうとするがすでにサキは横に回り込んでいた。

「はえーっす」

剣の先端がナッツの腕をかすめる。

それだけで、クリーンヒット並みにライフが削られた。

「〔筋力〕強化も痛いっすね」

「次は当てますよ」

そこから夏実は、ひたすらかわすことに専念し始めた。

逃げる敵を攻撃するのは難しい。ナッツは危なげなく避け続ける。

一分ほど経って、夏実が笑みを浮かべた。

「動き、読めちゃったツすよ」

「うっそ！」

「嘘です」

美咲が動揺した。本人も気付かないほど、わずかに攻撃のリズムが乱れた。

その瞬間、ナッツのナイフはサキの胸を貫いていた。

サキの動きが止まる。その隙に二発、三発と攻撃を叩き込まれ、その場に崩れ落ちる。

「勝者、夏実ちゃん！」

負けた美咲自身が、大きく宣言した。

観戦していた二人も、手を叩いた。

「やべ、下校時刻ギリギリじゃん」

綾乃に言われて、時計に注目するとすでに時刻は六時半を回って

いた。

辺りは暗くなり、窓の外の住宅街には無数の白い明かりが灯っている。

「はい、夏実ちゃん、賞品です」

「お、来たよこれ！ んん、んまーい！」

早速箱を開けシークリームを頬張る夏実。

四人は急いで荷物をまとめ、小型パソコンをたたみポーチに収めると、学校を後にした。

【地下闘技場】の観客席。高級な装備に身を包んだ二人の戦士が
プライベートチャットで会話している。

「どう？ 今の」

「ナッツって人？」

「そうそう。今度INしてたら誘ってみない？」

「でも、初心者っぽかったど」

「すぐ育つよ。装備はプレゼントすればいいし」

「……危険じゃない？ 他人を巻き込むのは」

「いやいや、あんなの都市伝説レベルの噂だっつーの。

気になるじゃんか。バーチャルクエスト、“地下王”」

3： 初クエストへ

学校の中にあつて、何から何まで白い、異質な部屋。保健室。ベットのカーテンを開けると、夏実が横たわっていた。

「あ……部長……」

「やあ、夏実ちゃん」

購買部で買ってきたパック入り飲料を渡す。

「何で『ボロリツチ』？」

「美味しいからに決まってるじゃないですか」

美咲の笑顔に対し、夏実は微妙な表情だ。

乱れた髪をかき上げながら、上体を起こす。

服装は、体操着のままだった。

窓を開けると、気持ちの良い風が吹き込んで来る。

「あ、これ、意外とウマ」

「でっしょー。私、家でゲームするときは大抵それ飲んでるから」

「まじすか」

「にしても、びっくりしたよ」

美咲はベツトに腰掛けた。

「夏実ちゃんが倒れたって聞いたから……」

「いやあ、大したことないっすよ。良くあることだし」

口ではそう言うものの、いつもの様な元気さはない。

「今日はどうする？ きついなら休んどいてもいいよ」

「そっだなあ……。部室には行きたいけど、バーチャルやるのはちよっときついか」

「だよね。見学でいいよ」

太陽光を反射する真っ白なカーテンが、風に揺らいた。

「悪いねえ、いつも迷惑かけて」

「気にしないでよ。病み上がりなんだから、体には気を付けて」

「うん……」

「絵梨さん、スキルはどうなん？ 上がってる？」

「上げてるよー、魔法メインで」

「あれ、絵梨さん魔法上げてるんだ」

時刻は四時十分。

四階の部室に最初に集まったのは、絵梨と綾乃の二人だった。

「綾乃は？」

「アタシは遠隔メインの、近接少々って感じかなあ」
言いながら、二人はパソコンを立ち上げる。

ゲームにログインすると、エルとアヤカシはまだ【地下闘技場】にいた。

暇つぶしにPVPをしながら待っていると、しばらくして、美咲と夏実がやってきた。

「お、もう集まってますね。PVP中？ どっちが勝ってます？」

「うーん、五分五分かなあ」

「えー、アタシの方が一回多く勝ってるよ……うな気がする」
相変わらず自信無さ気な綾乃である。

「あ、絵梨は魔法使うんだ」

部長がディスプレイを覗き込んでいる。

「うん、特に「補助魔法」ね」

「スキルレベルいくつ？」

「20」

いずれのスキルも、レベルの上限は100である。

つまり、エルの「補助魔法」は、最高レベルの五分の一まで到達しているのだ。

「あ、皆さんにお知らせがあります。

まず一つ目、今日は夏実ちゃんの体調が悪いので、見学です」

「そうなん？ 夏実」

「うん。悪いね、綾乃、絵梨」

「それともう一つ。

ここには来ませんが、今日の部活は私の知人に協力してもらいます」

「知人？」

「うん、私にこのゲームを紹介してくれた人」

美咲はすでにパソコンを起動していた。

エルとアヤカシの前に、サキが現れる。

「ちょっと待ってね。今からその知り合いにメッセージ送るから」

数分後、探検家風の服を着た青年が現れた。

『よろしく』

チャットでメッセージが送られてくる。

『よろしくー』

部長が代表して挨拶を返す。

『部員には私から、今日のクエストについて説明しとくから』
『了解』

「じゃあ、今日のクエストを説明します。

今回向かうのは【英雄の丘】から西に進んで、

【廃教会】っていうダンジョンです。

クエストはランク3になります」

絵梨が手を挙げた。

「はい、部長。ランク3ってのは？」

「あ、これはクエストの難易度ですね。

1だと、私達三人でも何とかなるレベルです。

それで、ランク3は今のメンバーじゃかなりきついレベルになります。

夏実ちゃんがいれば、もしかしたら何とかなるかもしれませんが

……

まあ、今回はマッドさんがいるんで大丈夫でしょう」

「部長、マッドって何者なんすか？」

部長とはどういう関係なんすか？」

夏実は、興味の有ることは基本的に遠慮なく聞く。

「まあ、昔馴染みですね。といっても、現実で合うことは滅多になくて、

ほとんどゲームの中での知り合いですけど……

それで今回ですけど、【廃教会】の最奥に棲む

《セント・タランチュラ》を討伐するクエスト“聖者のいた教会”を攻略します。

出現モンスターの攻略法なんかは各自ネットを参照してください。

それじゃ、皆さんここで準備を」

皆、思い思いにクエストの準備をする。

絵梨は、装備中の武器である、ブルーストーンの杖を魔法屋で修理し、

さらに、マナ回復薬を買い込む。

マナは魔法を使うために必要な、いわゆる魔力だ。

そのため、マナ回復薬は魔法使いに取って必需品である。

マナさえ十分なら、ライフは魔法で回復できるため、ライフ回復薬は買わない。

「準備終わったよ」

絵梨が部長に伝え、綾乃も目で合図する。

『準備オツケー』

部長がマッドに、チャットで伝える。

『了解。今から移動します』

マッドを先頭に、四人は歩き出した。

一行が【地下闘技場】から地上、【英雄の丘】に戻る。

ゲーム内時間は夜、現実のものより大きな赤い月が浮かんでいた。

エル達は、黒い鎧を着た巨大な象、

《バトル・エレファント》の背中に揺られていた。

マッドが、コマンド「英雄象召喚」で呼び出したものである。

象は風の吹き抜ける夜の草原を、ゆつくりと踏みしめながら歩く。

『これ便利だね。取得条件は?』

部長とマッドはチャットで会話している。

言葉づかいからして、かなり親しい仲だと分かる。

『アウトドア系スキルの「騎獣召喚」をレベル80で』

『うちの部内でも、誰か覚えると便利かもね』

数あるスキルは三つのグループに分けられている。

「生命力」、「筋力」などのステータス系スキル。

「剣術」、「補助魔法」などの戦闘系スキル。

「騎獣召喚」、「釣り」などのアウトドア系スキルである。

それぞれのグループ内のスキルレベルの合計値は300が上限であり
上級者になるとスキルの取捨選択を迫られる。

「綾乃、今「弓術」スキルいくつ？」

後ろで退屈そうに見ていた夏実が声をかける。

「つて、何全力でくつろいでんの？」

振り向くと、机を三つ並べて、その上に寝そべってる夏実がいた。

「いいの、私は病人なんだから。で、「弓術」スキルは？」

「えっと……」

スキルウィンドウを開いて確認する。

「22だね」

「じゃあ、もう「ファイア・アロー」使えるんだ」

「ファイア・アロー」は「弓術」スキルを20以上にすると
使用できるコマンドである。

どんな弓矢にも熱属性を付与して攻撃することができる。

序盤で熱属性に弱い敵は多く、その利便性は高い。

『ちょっといいかい、みんな』

パーティ全員に、マッドが語りかける。

教室のメンバー四人は皆モニターを注視した。

『これから、クエスト攻略の手順について確認する。』

まずは【廃教会】の地形だ。

一階、二階、地下礼拝堂。裏庭と、そこに建つ物置小屋。

この五つが主なマップとなる。

このうち、今回の討伐目標《セント・タランチュラ》の生息地は地下礼拝堂。

ただし、地下礼拝堂への階段は隠し階段になっており、

【廃教会】内の四つの装置を作動する必要がある。

今回は効率を考えて、難易度の高い一階と二階は僕が一人で、裏庭と物置小屋の装置は三人で起動してもらう。

なお、このクエストにはタイムリミットがある。

教会に入るとクエストが開始し、そこからリアルタイムで四十五分。

それを越すと結界が作動し、強制的にダンジョンから追い出される。

最後に注意事項だが、【廃教会】にはランダムで《デーモン》が出現する。

こいつは正直、僕にも手に負えない。

奴を見つけたらとりあえず逃げる。

時間を消費してもいいから、とにかくやり過ぐすまで隠れること』

『《デーモン》の索敵タイプは？』

綾乃が聞いた。彼女は情報収集に対して少々のかたまりがある。

美咲や夏実はその知識を頼りにもしている。

『遠距離の視覚探知と広範囲の魔力探知』

マップが端的に答える。

モンスターがどのようにして敵の位置を見分けるか、それが索敵タイプである。

視覚で探る者もいれば、嗅覚や聴覚、魔力を探知する者もいる。

「つまり、《デーモン》の近くでは、魔法は使っなくなってこと、だよ
ね？」

絵梨は無知なりに理解し、確認する。

「見えてきたね」

じっと画面を見つめていた美咲が言った。

草原のはずれ、暗い森の木々の上に、古い教会の尖塔が見えていた。

現実時間は夕方五時。窓から夕日が差し込む。

夏実は並べた机をベッド代わりに、おへそ丸出しで寝そべっている。

「夏実、はしたないぞ」

綾乃が夏実のおなかを触りながら言う。

「ひゃっ！ やめろよ、セクハラ」

「おりゃ、ぐりぐり」

「ひいっ！」

「お、かわいい……」

その言葉に赤面する夏実。

「や、やめろって」

綾乃はしばし手を止める。

街を走る電車の音が、かすかに聞こえる。

「もついいの？ 体調は」

「え、心配してんの？ 綾乃が？ 何それ笑える」

「もういい、心配してやらん」

カラカラと笑いあう。

「大丈夫だよ、綾乃。……ほら、はやく戻らないと。もうダンジョ
ン着いてる」

「……おう」

日暮れの静かな教室で、綾乃はまたパソコンに向き直った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0128v/>

バーチャル

2011年10月9日02時52分発行